

# 「千葉氏を語る」だより

## 「千葉氏を語る」だより

会報誌第20号  
千葉氏を語る会  
事務局  
発行日  
令和7年  
7月28日

### 第十一回 総会開かれる

令和七年六月七日(土)午後一時

第十一回「千葉氏を語る会」の総会は、蘇我コミュニティセンター多目的ホールにて開催された。

定刻の午後一時、司会者より、本日現在の会員数四六名、出席者数十九名・委任状数十六名、併せて三五名で規約第八条の規定、総会員数の過半数を超えており、本総会は成立することを告げ開会の宣言がなされた。

### 向後 保雄会長の挨拶(要旨)

千葉開府九〇〇年記念事業に向けた様々の行事が催されている。千葉氏を語る会の皆さんも様々な活動しております。来年二〇二六

年六月一日に中央公園で記念式典が開催される予定です。先日六月一日には「千葉開府まつり二〇二五」で甲冑着用体験が開かれ子供たちも含め盛況でした。いよいよ来年です、市議会としても応援できよう頑張るので、今後とも支援のほど、よろしくお願いします。

### 議長を選任

議長には丸井敬司副会長を選出する。

丸井議長は、各議案担当の役員を指名し、それぞれに報告を求めた。

### 議事

#### ・報告議案

第一号議案 令和六年度 事業報告  
第二号議案 令和六年度 決算報告  
第三号議案 令和六年度 監査報告

第一号〜第三号報告議案の説明の後、一括して質疑を求めたが、異議なく原案のとおり承認された。

#### ・協議議案

第一号議案 令和七年度 事業計画案  
第二号議案 令和七年度 収支予算案

第一号、第二号協議議案の説明の後、一括して質疑を求めたが、異議なく原案のとおり承認された。

#### ・報告事項

令和七年度 新任役員は大野芳高顧問は小川智之及び丸井敬司の就任を報告、拍手を以って了承された。

以上で議案審議の全てが終了、議長は総会の終了を宣言した。

記念講演会に入る前に、千葉市長 神谷 俊一様からのお祝いのメッセージが都市アイデンティティ推進課長上坊寺様から披露された。メッセージをご紹介します

本日は、記念講演会が開催されますこと心からお祝い申し上げます。

千葉市では、令和8年(2026年)にまちが開かれてから900年という大きな節目を迎えます。この歴史的な節目を迎える喜びを多くの市民の皆様と分かち合うとともに、過去を振り返りより豊かなまちの未来を築いていくための契機として、市民や企業の皆様との連携を深めながら、都市の、そして皆様の記憶に残る、千葉開府900年記念事業を進めてまいります。

このような中、市民の皆様が本市の歴史を学び、親しむ機会を提供いただきましたことは誠に喜ばしく、大変意義深いものと存じます。

開催にご尽力されました皆様に敬意を表しますとともに、会のますますのご発展と、ご参集の皆様のご活躍、ご健勝をお祈りいたします。



千葉開府900年  
千の葉に 時を刻んで 900年

令和7年6月7日  
千葉市長 神谷 俊一

続いて、本会顧問であります県  
会議員の小川智之先生よりご挨拶  
があった。

## 千葉開府900年に向けて

千葉氏を語る会顧問

千葉県議会議員 小川智之

1126年（大治元年）、千  
葉常重が大椎から亥鼻へ本拠を  
移した時が千葉開府の年と位置  
付け、来年で900年の節目を  
迎えるようとしています。

千葉市では、この開府900  
年を迎える喜びを皆で分かち合  
い、次世代を担う若い世代が千  
葉市に誇りと愛着を持ち、より  
豊か未来に繋げていくために、  
「千葉開府900年」の銘を打  
った様々な取り組みをこの1年  
をかけて展開していくことにな  
っています。

この運動は、私が知る限りで  
は、開府850年を迎えた昭和  
51年頃に千葉の親子三代夏祭  
りが記念事業として開催される

など、一時盛り上がりを見せた  
ものの、時とともに停滞してい  
き、千葉氏の果たした功績など  
は、ほぼ市民の間で語られなく  
なっていました。

ちょうど私が議員になった平  
成11年頃からまた活動が再燃  
し始め、平成13年には、「新  
世紀・千葉市制施行80周年記  
念事業」として「千葉氏フォー  
ラム」が開催され、書籍も刊行  
されるなど、徐々に議会でも千  
葉氏を活用したまちづくりにつ  
いて取り上げられるようになって  
きました。

ただ単発な事業ですと、どう  
しても盛り上がりにはムラがで  
てしまい、定着に至らないことか  
ら、平成28年に、千葉市で  
は、「千葉市都市アイデンティ  
ティ戦略プラン」を策定し、都  
市アイデンティティを構成する  
4つの地域資源の中に「千葉  
氏」を明確に位置づけ、推進し  
ていくこととなり、開府890  
年記念事業として、「千葉氏サ  
ミット」を開催するなど、90  
0年に向けてスタートを切るこ  
とができました。

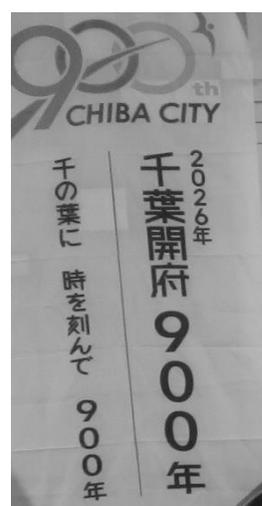
この「千葉氏を語る会」もこ  
の1年前に発足し、この運動を  
大きく推進していく一助となっ  
たところです。

私は、都市の活力を向上し、  
地域の活性化を目指すために  
は、千葉市に関わる方の千葉市  
への「愛着」「熱意」「誇り」  
が必要不可欠であり、それら  
を高めるためには、その都市が持  
つ特有の歴史を知ってもらうこ  
とが重要であることから、「加  
曾利貝塚」や「千葉氏」に関係  
する諸団体に身を投じ、様々な  
活動を展開してきました。

その中で、千葉氏と大いに関  
りのある妙見信仰の総本山であ  
る千葉神社の祭礼保存会に身を  
置き、妙見大祭の維持に取り組  
んできましたが、来年900回  
を迎える千葉神社の妙見大祭に  
おいて、是非「千葉妙見大縁起  
絵巻」に描かれている「千葉  
舟」や「結城舟」の復活を希望  
しております。

もう一年しかないのです、正  
直、厳しいものはありますが、  
ぜひこの夢の実現のため、語る

会会員の皆様のご理解ご協力を  
賜れば幸いです。  
いずれにしましても千葉開府9  
00年に向けて、ともに盛り上  
げていきましょう。



続いて、丸井 敬司副会長によ  
る演題「千葉介常胤と鎌倉幕府  
の創設」の記念講演が行われ  
た。

## 『千葉介常胤と鎌倉幕府の 創設』の発行に関して

今回の出版は、平成二五年に岩  
田書院より出版した『千葉氏と妙  
見信仰』に続くものです。前回の出  
版から十一年年目となりますが、  
長年の間、懸案事項であった『吾妻  
鏡』の問題点にやっと結論が出たの  
で、その内容について発表するに至  
りました。

本題とした『千葉介常胤と鎌倉  
幕府の創設』については資料が少な  
く、その多くは『吾妻鏡』に頼るも  
のですが、三十一年前に頼朝の房

総渡海の到着地点が相模湾の海流の流れから考えて鋸南町竜島ではなく、洲崎竜ヶ崎であった事を発見し、以後、『吾妻鏡』の記述に疑問が生まれました。

『吾妻鏡』は鎌倉幕府の制作された歴史書として知られていますが、通説では鎌倉時代の末期に北条氏の一族であった金沢氏関係者によって製作されたとされています。しかし、現存する『吾妻鏡』は全体的に問題点が多く、特に以仁王の令旨発給から頼朝の鎌倉入城までの間はそれが顕著です。

通常、古代国家において歴史書の編纂に取り掛かった場合、その作業は、当該政権の滅亡時まで続くものですが、『吾妻鏡』の場合、文永三年(一一二六)で終わっています。それは、『吾妻鏡』が、文永三年で終了していたことを意味します。つまり、現在、残っているものは後世に改められたものであると言う事です。ここに原文の改ざんの痕跡がみられるので、以後、文永三年制作の『吾妻鏡』を『原吾妻鑑』とし、現存する『吾妻鏡』を『現吾妻鑑』としてお話ししていきます。

こうした『現吾妻鏡』の問題点を検討した結果、今回の著作の表題

を「千葉介常胤と鎌倉幕府の創設」とし、内容的には以仁王事件から常胤の亡くなるまで間を検討してみました。これを全部お話しする時間はありませんので、本日の話は、これまでの研究成果に「以仁王の令旨発給事件」から「頼朝の鎌倉入城」までを中心にこれまでの研究成果に加えて『原吾妻鏡』の改ざんされた部分の復元という手法で考えてみました。

この手法で『現吾妻鑑』を見直してみますと、『原吾妻鑑』は驚くほど『延慶本平家物語』などの平家物語諸本や『山塊記』などの当時の物語や公家の記録と一致点が多い事が分かりました。今回の著述はこうした検討結果を説明したいと思えます。なお、筆者は二〇一七年の九月二六日に真鶴岬から安房の洲崎までの間を実際にヨットで航海し、この間の正確なデータを出版した本に載せましたが、この「房総渡海実験」の結果も検討に加えて述べていきたいと思えます。

さて、「以仁王の令旨発給事件」については以仁王、源頼政の二人の他に八条院、常胤の子日胤の二人が加わっていた事が既に指摘されていますが、更にこの事件を改ざんの

復元という手法で検討しますとこれまでの四人に加えて三善康信が加わっていたことが浮かび上がってきます。

康信についてはこれまでの研究では指摘されていませんでしたが、『現吾妻鑑』には「頼朝に挙兵を呼び掛けた康信が、清盛が知りえなかった【頼朝が以仁王の令旨を受け取っていた】という事を清盛より先に知っていた」とされていることから康信が以仁王の令旨発給事件に加わっていたことが覗われます。

続いて『現吾妻鑑』では頼朝が挙兵を決めた直後、頼朝は三浦義澄、千葉胤頼の二人と密談したとされています。しかし、石橋山の戦いの際、三浦軍に千葉氏と上総氏の兵が加わっていることから考えるとこれは上総広常の子常頭も参加はしていた事は確実であると思われる。また、続く「石橋山の戦い」には三浦軍には上総、千葉両氏の兵が加わっていました。これも『現吾妻鑑』からは除かれています。

また、「頼朝の房総渡海」では相模湾の海流や「房総渡海実験」から考えて到着地は通説の鋸南町の狝島(竜島)ではなく、安房の洲崎でした。続いて、頼朝を出迎えたのは三

浦義澄であり、頼朝が乗った船は伊豆山権現の熱海船で、これを用意したのは千葉胤頼であることが改ざんの復元から浮かび上がりました。

さて、「上総国府の戦い」は『現吾妻鑑』から除かれています。この戦いは実際、治承四年(一一八〇)九月十三日に行われたものであり、戦いには千葉胤頼と常胤の孫の成胤が参加していました。続く翌同十四日には成頼は千葉館に戻り、千田親正と戦っています。なお、同日の早朝、千葉館にいた千葉常胤は一族を率いて上総国府の頼朝の元に出かけていることが九年後の奥州合戦の記事から復元できます。

さて、「頼朝の鎌倉入城」と鶴岡八幡宮の遷座については、『現吾妻鑑』にはこの理由は書かれていませんが、九年後行われた奥州合戦の際、鶴岡八幡宮で祈祷された頼朝の「白幡」には「八幡神」の他に「伊勢大神宮(天照大神)」の文字が並べて書かれていたことから北山の鶴岡八幡宮には天照大神が合祀されており、その別当寺には天照大神の本地仏である妙見菩薩が祀られていたことが確認されます。

鶴岡八幡宮の別当寺に妙見菩薩

が祀られていたことは『現吾妻鑑』には十回にわたる「尊星王法(妙見菩薩法)」が行われていた記事があることから実証が可能で、そして、これが、鶴岡八幡宮が北山に遷座された理由となります。

このように頼朝の挙兵には以仁王の令旨事件から千葉常胤が関わっており、頼朝に鎌倉に入るように勧めたのも常胤であったし、平家合戦や奥州合戦ではその功績第一番とされたのも常胤でした。頼朝の代には正月の椀飯は常胤の館で行われており、頼朝の死後、梶原景時による結城朝光の讒訴事件が起こった時、鶴岡八幡宮の回廊に六人の有力御家人が集まり、景時弾劾の血判状が作られました。この最初に署名したのは常胤でした。

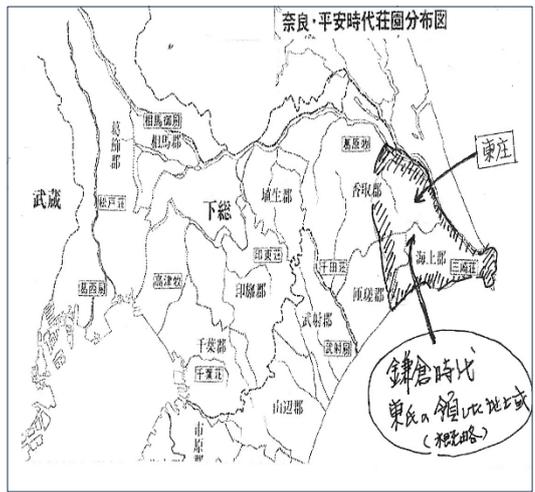
このように今回の講演では鎌倉幕府創設期に千葉常胤の果たした役割的を絞ってお話をさせていただきます。ご静聴、ありがとうございます。

### 東氏(千葉常胤六郎太夫胤頼)

会員 江波戸弘安

下總東氏の祖は 源頼朝の挙兵に創設に大功を立てた千葉常胤の第六子 六郎太夫胤頼である。

その領地は胤頼在京して上西門院統子(鳥羽天皇第三皇女)に出仕し、下總国香取郡東庄三十三郷香取郡東庄町、小見川町、山田町千潟町)を賜り又、父常胤から頼朝より拝領した海上郡三崎庄五十五郷(銚子市、海上町、飯岡町の一部)を併せ領したと言。胤頼以後、二代重胤、三代胤行と伝領し、「承久の変」に従軍した胤行の戦功により、美濃国郡上郡山田庄(郡上郡大和町)を賜り移ることになった。一方庶流は東庄、三崎庄にまたがる下總台地東部を中心に盤踞し、東氏、又は海上氏として活躍し戦国末までその勢力を温存した。



### 歌壇に通ずる縁

胤頼は在京する中で、従五位下に叙せられ、六郎太夫と言われた。この様な環境にあり、子の重胤、孫の胤行などは將軍から直接寵を受け、歌人として鎌倉歌壇にて活動している、こうして東氏嫡流家が和歌に秀でた家と成つてゆく道をつくつた。

胤行は藤原定家の子、為家から歌道の奥義を学び、為家の娘を妻に迎えている、又定家と源実朝は歌道の上では子弟の間柄であつたので勢い胤行は実朝の側近として仕えてその寵愛を受ける事になった。又、側近として仕えていた二代重胤も実朝に仕えており後「古今和歌集」研究の第一人者としての美濃東氏第九代 常縁に血縁し、千葉一族の中にあつて単なる武辺だけでなく文化的香気を放つた武家として特色を發揮している。

### 勅撰和歌集に入選とは

歌が上手あることは当時の社会(京都の中央政権)朝廷、幕府から本人の存在が正統なものと公に認められた事になる。

東常縁を筆頭に美濃東氏、初代胤行、二代行氏、常縁近縁者の氏胤

など入選者が多く見受けられる。後年、惣領家滅亡のあと下総宗家を継いだ馬加系統の本佐倉城でも時の当主である千葉勝胤とその周辺の家臣団などが中心となり、有力歌人の参加を得て活発な歌壇活動(雲玉和歌集に見られる)が行われていたと言。一族の歌に繋がるものがあつた。

### 古今伝授

#### 古今伝授とは

勅撰和歌集である古今和歌集の解釈を中心に秘伝として師匠から弟子へ、又は父から子へ伝える事、和歌の内容や解釈、発音の仕方も一つ一つ口伝し、又、切紙、抄物等によつて伝える事。

### 古今伝授を受け継いだ人

応仁の乱で荒廃していた世で連歌師として名の出ていた宗祇は広く天下を見渡した処、古今集の学者として常縁に勝る者は無いと判断し美濃の奥地山田庄まで訪ね弟子入りを果たし伝授を受けることになった。伝授は文明三年(一四七一年)二度に渡り行われた、宗祇は都へ帰つてこれを三人に伝授した。

その一人は三条西実隆で更に宮廷(伝授御所伝授)、もう一人は牡丹

花肖柏く堺伝授く奈良伝授(庶民の間)、そして三人目は近衛尚通(近衛家からは伝わらず)

この様な形で宗祇は幅広く庶民の間に広めていった、しかしその後幕府の保護を受けた宮廷以外はあまり広がらず、これを案じた武

将の細川幽齋は伝授のルートを一つに纏め更なる伝授に尽力した。関ヶ原の合戦の折、幽齋の田辺城は石田三成軍に包囲されてしまし古今伝授の家が絶える事を恐れた後陽成天皇が勅命で包囲を解かせたという話もあり、こうして古今伝授は江戸時代へ伝わってきた

**東氏一族から優れた学僧が多数輩出された。**  
中世における京都、鎌倉五山は学問、思想、文芸、社会生活に大きな影響を及ぼした。これら禅林に導入された漢文学は室町幕府の保護のもとに五山文学として開花した。東氏の一族からは優れた学僧が現れ、五山文学に残した足跡は少なからざるものあり、

**龍山徳見**(りゅうざんとくけん)  
(一二八四〜一三五八)  
臨濟禅学僧、下総東庄笹川出身、中国元留学四〇年、

建仁寺、南禅寺、天竜寺住持  
**江西龍派**(こうさいりゅうは)  
(一三七五〜一四四六)

東師氏の次男、五山四本指、五山抄物(テキスト)作成、建仁寺、南禅寺住持  
詩文優る

**慕哲龍樊**(ぼてつりゅうはん)  
(江西の弟) 建仁寺住持  
詩文に優れて一休宗純に幼時詩文教示。

**南曳龍朔**(なんそりゅうさく)  
(東常縁の兄弟)  
中国明へ留学  
**正宗龍統**(しょうじゅう)  
(一四二八〜一四九八)  
南曳龍朔の弟、五山の詩僧としてほまれ高い。建仁寺住持、家元制度作る。

**常庵龍崇**(じょうあんりゅうすう)  
(一四七〇〜一五三六)  
常縁の子、建仁寺住持、  
詩僧として優れている。

**五山の実態**  
京都、鎌倉の五山は官立の大寺  
京都 (1)天龍寺、(2)相国寺、  
(3)建仁寺、(4)東福寺、  
(5)萬寿寺

鎌倉(1)建長寺、(2)円覚寺、  
(3)寿福寺、(4)浄智寺、  
(5)浄妙寺

**五山の体制**  
五山の上に南禅寺、五山の下に十刹、の下に諸山―全国へ

**五山の業務**  
現在の中央官庁と国立大学を合体した様な組織、外務、文部、科学技術、産業、財務、裁判等広範囲に行う行政組織、中国の文化全般を五山経由で導入し、五山機構を通じその情報を再編し、日本の政治、外交を含めた伝統文化を創り出し、日本全国へ広め、外国との外交を行う、日本中の優れた人材(禅僧)が集められた。禅僧のトップ(僧録という)今の大臣、

**鎌倉幕府の滅亡**  
「承久の変」後、幕府に抑えられた朝廷は、後醍醐天皇が幕府打倒に立ち上がり足利尊氏など有力後家人達が立ち上がり、天皇を味方にし、幕府と戦うことになった。この時千葉氏当主の貞胤は幕府に背き新田義貞と共に鎌倉攻撃参加、美濃東氏も朝廷の命により地元領主鷲見氏(忠保)の勢力を得、北条氏討伐に参加した。一三三三年鎌倉幕府は滅亡した。

**南北朝の動乱**  
鎌倉幕府の滅亡後、一時、公家政治(建武中興)が行われたが、足利尊氏は後醍醐天皇に対抗し、新天皇(光明天皇)を京都に立て(北朝)、一方後醍醐天皇は吉野へ逃れ(南朝)、一つの朝廷に分かれた。千葉氏は胤貞(下総千田庄、九州千葉氏)は尊氏と共に北朝へ味方、貞胤(下総宗家)、美濃東氏は新田義貞と共に後醍醐天皇方へ味方することとなり、千葉氏は分裂へと向かう。胤貞の病死もあり貞胤も尊氏に降伏し北朝側となった。これで貞胤も千葉氏宗家を安堵されることになり千葉氏は下総と九州に分裂することになった。

**室町幕府の成立**  
室町幕府は関東八州、甲斐、伊豆の十ヶ国を鎌倉府(長官、鎌倉公方)に任せて支配させた。鎌倉府の長官は足利尊氏の息子基氏

の家系をあて、補佐役(関東管領)に上杉氏を世襲させた。しかし代を重ねると次第に幕府と対立する傾向が強まり、幕府の意向を受けた関東管領上杉氏はその動きを抑えようとしたため、鎌倉公方と関東管領との対立が表面化、千葉氏もその混乱、対立に巻き込まれることになった。

#### 永享の乱(一四三八年)

公方(持氏)が幕府(義教)に反旗をひるがえし、上杉氏に逆に亡ぼされた。

#### 享徳の乱(一四五五年)

公方は足利成氏によって再興されたが対立収まらず上杉氏によって鎌倉を追われた。

#### (古河公方の成立)

混乱に巻き込まれた千葉氏は結果、宗家の滅亡に至る。

常縁、幕命により本家筋の内乱の收拾のため長期に渡り(一四五〇〜六九年)下総へ下向、奪われた城を和歌の取り持ちで取り返す。十四年間の長きに渡り常縁は本家筋、千葉氏の内乱の收拾の為、幕命により下総へ下向していた。あたかも応仁の乱の時東軍に属した東氏の篠脇城

は、西軍に属した美濃国守護土岐成頼の執権である斎藤妙椿に奪われてしまった。これを聞き常縁は嘆き、心の内を和歌に詠んだ。

あるがうちかかると世をしも見たりけり人の昔のなほも恋しき

と亡き父益之在地當時を懐かしんだ悲嘆の心境が広く都で同情を呼び、一方和歌に秀でた妙椿もこの歌を聞き、幕府から下総

へ同行していた浜春利の仲介もあり「和歌十首を詠んで贈られれば城を還そう」と伝えた。妙椿も常縁も室町幕府の奉公衆であり旧知の間柄で話を通じ合う

下地があつた。常縁は直ちに十首の歌を詠んで示した処、十首の内、最後に詠んだ歌

わが世経んしるべと今もたのむかな美濃の小山の松の千歳を

に妙椿はたくこれに対し常縁の本心を感じとり

言の葉に君が心はみずぐきの行末とおらば跡は違わじ

と常縁の今の気持ちさえ変わりが無いなら、あとは引受けたという意の歌で優雅な気持ちの支援がなされた、時の將軍義政の

知る処ともなり、同じ風流人同志でありこんな優雅な事を放つとくわけにはゆかんと返還を實現させたと言う。後の世で、司馬遼太郎にそれを原稿料とすれば「常縁は古今で最も高い稿料を取ったことになる」と言わしめた。尚、常縁が妙椿に贈った和歌十首は碑として東氏館跡の庭園内にある。

#### 美濃東氏の滅亡とその後

常縁の没後、家督は氏数の子元胤と氏胤と継がれたが、中央の戦国動乱下にあつて東氏は内憂外患により苦境に立っていた。

一四八九年美濃国土岐氏の猛攻を受けた時、郡上内に散在する東氏庶流達は次第に宗家をしのぐ実力を貯え独立性を強め宗家

にとつて脅威的な存在になりつゝあつた。氏胤の後、常慶が篠脇城の主となつた。一五四〇年

越前朝倉氏の侵攻を受けた、これに対し家臣で常縁の血縁である胤縁、盛数兄弟の働きにより

東家は勝利を得ることができた。常慶は遠藤兄弟の功績を認め自分の娘を盛数に与え両家の

絆の強化を図つた。ところが常慶の嫡男常堯は若く、戦功もななく頭もあまり良くなかった様で、朝倉氏が再び攻めて来る事を恐れ、更なる防備のため長年の居城である篠脇城から赤谷山に城を築き常慶の嫡男常堯が入つた。その常堯は自らの力に不安を感じ遠藤胤縁の勢力を頼りにしたいとその娘を自分の妻にし遠藤氏を後盾とすれば動乱を乗り切れると考えプロポーズするが胤縁から断られ娘は他家へ嫁がせた。これに大層憤慨した常堯は恨み、仕返しを企み、ある時城の行事で胤縁が登城した折、家臣に殺害させた。朝倉の侵攻を止めた遠藤兄弟を敵に回すことになり、弟の盛数は常堯の赤谷山城を攻める為、川を隔てた処に陣屋を作り(現、郡上八幡城)、両者の戦いで赤谷山城は落ち、美濃東氏はいかに滅亡することになった。初代胤縁が阿千葉城を築いてから三二八年になる。美濃東氏は滅亡する事になったが常堯は妻の里である白川郷の内ヶ島城に避難、一五八三年(天正十三年)に起こつた

天正大地震により山津波に襲われ内ヶ島一族と共に亡くなった。常

慶の娘婿、遠藤盛数は郡上郡の領主となり八幡城主となった。その子

慶隆はバランス感覚にたけた武将で信長、秀吉に仕え、関ヶ原の合戦で

は家康に属して郡上二万四千石の大名として、紆余曲折を乗り越え

明治に至った。慶隆の妹、見性院は山内一豊の妻となり貞淑な人柄は

広く世に名を馳せたことが知られている。最後の藩主遠藤胤城は勅

許を得て「遠藤氏」を「東氏」に改め子爵となった。明治十一年。

以下、東氏関連年表と東氏系図を掲載します。

編集後記 編集子

会報誌二十号をお届けします。

今回号では令和7年6月7日開催されました。総会と講演会の記事と、(会員)江波戸さんの投稿記事を掲載しました。

年表

中央の動向	地方 (下総、上総、郡上、他) 動向
1180年 源頼朝 挙兵	千葉常胤及び他の関東武士団、頼朝に加勢 平氏(西国)、藤原氏(東北) 掃討
1192年 鎌倉幕府成立	戦功により千葉氏 全国各地に所領を得る 千葉氏六党(常胤子息6人) 各地に領地を得、各々独立 常胤六男(胤頼) 頼朝挙兵に当初より活躍 下総国香取郡東庄三十三郷(小見川、山田、東庄、銚子、干潟) } に所領を得る 下総国海上郡三崎庄五十五郷(銚子、飯岡、海上) } 以後東氏と名乗る(東氏の祖)
	1221年 承久の変 “の戦功”により東氏3代胤行は美濃国郡上郡山田庄(郡上市) 加領される (後鳥羽上皇が幕府執権の北条義時に対して討伐の兵を挙げて敗れた戦)
	1249年 山田庄(郡上東氏) 初代胤行は三男行氏(2代)を伴い山田庄へ入部 <b>阿千葉城</b> を居城とする(初代胤行~2代行氏~3代時常 の3代で90年間)
1333年 鎌倉幕府滅亡	1333年 5代常頭 護良親王の令旨を受け 在地領主鷲見(忠保)の勢力を得、北条氏の討伐戦に参加
1336年 南北朝の動乱 (1392年 南北朝合一)	南朝方 { 東氏(郡上) } X 北朝方 { 千葉胤貞(九州千葉氏) } に分かれて (後醍醐天皇) { 千葉貞胤(下総) } (足利尊氏) { } 内紛発生
1338年 足利幕府成立	<b>篠脇城</b> を居城とする (4代~11代 230年間) 4代氏村~5代常頭~6代師氏~7代益之~8代氏数~9代常縁~10代元常~11代常慶(最後の (1394没) (1441没) (1471没) (1484没) (1561没) 郡上東氏)
	1455年 “享徳の乱” 関東全域を巻き込んだ内乱 <b>千葉胤直(千葉氏宗家)</b> 内乱に巻き込まれて滅亡へ
1467年 応仁の乱	1455年 常縁幕命により美濃から千葉氏の内乱に関与の為下総へ下向する (14~5年間滞在) 千葉胤直滅亡のあと、力を得た馬加、千葉康胤は子の輔胤に千葉氏宗家を継がず。 常縁は馬加、千葉康胤の本拠を攻め、胤直舎弟(胤賢)の遺児實胤、自胤を支援、自胤は武蔵(東京台東区)へ移り、武蔵千葉氏を継承、実胤は出家し美濃国へ退隠。 石浜城
	1468年 美濃守護代斎藤妙椿、郡上へ攻め入り篠脇城を奪う、 1469年 常縁 奪われた所領を 浜春利の仲介により和歌で取り返した。 1470年 <b>古今伝授</b> 常縁 二回に渡り、宗祇に伝授す、
~1600年 戦国時代 信長、秀吉による統一	1532年 11代常慶、郡上を統一す、 (鷲見氏滅亡) 1540年 常慶、越前朝倉氏に攻め込まれるも、家臣遠藤胤縁、盛数兄弟は朝倉を圧倒し追い返した。 常慶の嫡男常亮は自身の嫁取りで家臣遠藤胤縁の娘にプロポーズするも断られ、これが原因 争いとなり、ついに320年続いた東氏は滅亡へ 両家間で
	1559年 <b>郡上東氏</b> 滅亡、 常慶、常亮親子は追放される。

